ライフ
ストーリー

S･F さん
（2018 年 3 月文学部卒業）

自分らしく

私は関西学院大学文学部出身のS･Fです。もともとは地方出身で、大学進学にあたり兵庫にでてきました。卒業後は地元に戻り、地元の企業で働いています。

セクシュアリティとしてはバイセクシュアル、もしくはパンセクシュアルであると認識しています。私が自分のセクシュアリティを認識したのは、保育所のころから親交がある「生まれた性・自認も女性」の友達を好きだと気づいた 16～17 歳の時です。それまではセクシュアリティの概念すら知らず、どうしてこんな気持ちを友達に抱いてしまうのか、この気持ちがなんなのか、どうしてなのかすごく自分が良くないものだと感じていました。誰にも相談できず、この感情を抱いている自分がおかしいと思い、自己嫌悪に陥っていたのを今でも覚えています。

そんな私が初めてカミングアウトをしたのは高校一年生の春頃でした。その想いをよせていた友達に「気持ち悪いやろうけど、、、」と謝りながら告白しました。そして告白した際にその友達は拒否を示さず、受け止めてくれました。それまではひたすら自分はおかしいのではないかと思っていましたが、自分以外の人に初めて認めてもらい、自分を肯定的に見ることができました。そして「女とか男とか、そういうくくりで好きになったんじゃない。この子やから好きになったんや。好きになるのに性別とかそういうの関係ない」、そう思えるようになりました。ですが当時の私自身にまだマイノリティの知識がなく、周囲や世間も現在のように寛容でなかった（気がする）ので誰にも打ち明けず、秘密でお付き合いをしていました。

他の人にカミングアウトするきっかけとなったのは、高校一年の夏～秋頃にSNSでセクシュアリティのハッシュタグをみつけたことでした。そこで自分自身以外にもたくさん同じ思いをしている人がいることを知り、そうした人たちが更に自分の性別や相手の性別を気にせずやり取りしていることを知って、性別なんて関係ないと思う事ができるようになりました。

「自分たちの関係は自分たちがわかっていればそれでいい。それだけで満足」と思っていましたが、やはり出かけた際に手をつないだり、周囲から認められたいという思いはあったので、初めて同じ高校の友達２人に私が「こうである」と伝えました。全く何も思わなかったということは無く、「気

持ち悪がられたらどうしよう。今までのような友達の関係でいることが出来なかったらどうしよう」と少しの不安を抱えていました。ですが、いざカミングアウトしてみると、2人とも気持ち悪がる様子もなく、むしろそのうちの1人は「私もそうかもしれん」とカミングアウトしてくれました。

私が「好きになった人が好きやねん。だから性別は関係ないよな」と言うと、「そりゃそうやな」と返してくれました。私はその時安心しました。理解している人がいる、そして私や彼女だけでなくセクシュアリティで悩んでいる人は大勢おり、身近な人にもカミングアウトしていないだけで沢山いるのだと。

この経験から私の認識が少しずつ変わっていきました。まずセクシュアルマイノリティについて調べ、様々なセクシュアリティがあるということを知りました。自分が「ナニ」なのか正体がわからないとき、私は不安に感じる傾向があったので、まず自分は何に一番近いのかということを認識することで、それまで不安に感じていた思いを吹っ切ることができました。「私は私」、そう思う事ができました。

そこから高校を卒業し、関西学院大学に入学しました。大学に入学し、CASSIS というLGBTのサークルがあることや、LGBTを学べる講義があることを知り、受講しました。高校まではSNS等で繋がることしかできず、まだ広いようで狭い世界でしたが、サークルや講義を受けることでより世界が広がりました。身近に色んなセクシュアリティの人がいることで、私の中で当たり前にではなかったことが当たり前になりました。

大学でできた仲の良い友人にはカミングアウトをしています。大学ではほとんどの方が初対面です。一から交友関係を始める必要があります。一から始めるというのが、カミングアウトする私にとって、とても良い点でした。私がそういう人間であるということを理解してもらいつつ交友関係を深めることができるからです。また、もし相手が理解するのが難しい方でも、その理解が難しい点を交流していく中でキャッチしやすいからです。どうしても人なので、わかっていても理解できない人や理解できても受け入れるのが難しい人はいます。とても悲しくつらい場合もありますが、押し付けるのではなく適切な距離や気持ちを保ちながら接することでお互

い歩み寄れる場合もあります。

20 歳の時に、私は地元の成人式に参加しました。久しぶりに会う地元の友人は懐かしく、とても楽しかったのを覚えています。しかし、その時の私の一人称は「俺」でした。大学生活では友人の前で当たり前のように使っていたので、何も思わず成人式当日も使っていました。すると「一人称、なんで俺なん？変えなよ～」と友人の一人が言い、周りの友人たちも「普通、私とかやろ～（笑）、まぁ僕よりましなんかな？（笑）」と言っていました。私は心の中で心底「なんで一人称でそんな言われなあかんの」と腹が立っていましたが、表情はにこやかに「やっぱり～？（笑）」と返したのを覚えています。ここで私は久しぶりに「あ、あかんやつや」と思いました。地元の友人にはもちろん悪気はなく、むしろ私のことを思って言ってくれたのだと思います。でも私にとっては何か一つの大きな壁のように感じました。そして地元の友人にはやはりカミングアウトできないなと思いました。そして、久々にセクシュアリティのことやマイノリティのことが頭をよぎり、まだ「当たり前」ではないという思いを強く持ちました。

2022 年の今、私が初めて自分のセクシュアリティに気付いた時から 10 年以上経ちました。この 10 年でLGBTやマイノリティ、セクシュアリティに対する見方はそれ以前の 10 年に比べてかなり世界的に、そして日本においても大きく変化したと思います。今では新聞やニュースで当たり前のようにその文字をみます。10 年前は考えられないことだったのではないかと思います。授業でも取り上げられ、学校の制服にも変化を及ぼしました。それでも尚、やはりまだまだ社会には浸透していないと思う時もあります。

社会人になり、私は地元の中小企業に就職しました。仕事場でカミングアウトすることはないと思っていましたが、仲の良い同期や近しい先輩数人にはカミングアウトしています。社会に出た際も一からの交友関係の築きとなります。私という人間を理解してもらい、少しずつ距離を縮めた際にカミングアウトすると否定されることなく、むしろ「高校生の時、私の周りにもいてたよ」と受け入れてくれました。やはりカミングアウトするのはいつでも勇気がいり、恐怖がつきまといます。なのでその時、ホッとした

のを覚えています。「私は私、好きになった人が好き。そこに性は関係ない」と思う事ができました。ですが、管理職も含む飲み会で一度さらっとカミングアウトをしてみた時に、肯定も否定も何もなかったことがあります。その際、私は「まずった」と思いました。その話に触れることなく次の話題に移っていき、内心複雑な思いのまま次の話題に積極的に話を進めていった記憶があります。仲の良い同期や先輩にはカミングアウトしていましたが、やはり会社の少し大きな輪や少しご年配の方々への理解はまだ難しく、浸透していないのだと気づかされました。これは私の偏見かもしれませんが、私の経験上、田舎ほどLGBTなどのセクシュアリティに寛容でなく、ご年配な方程理解が難しいのではないかと感じています。

私が親へカミングアウトした時もそうでした。私の親はもう60歳になります。初めて親や家族にカミングアウトしたのは大学生の時でした。少し歳の離れた兄2人は、どちらの兄もすぐに受け入れてくれました。相談事にも乗ってもらったのを覚えています。次に母親に伝えました。ですが聞いているのか聞いていないのかいまいちわからない反応、返答でした。そして会うたびに少しずつ私のセクシュアリティについて話しましたが、いまいち要領を得ず、口論になることもありました。しかし根気強く話すことにより、母は理解してくれましたが、受け入れがたく思っているということが表情より伝わってきました。また父については大学卒業後に少しだけ軽くその話に触れてみましたが、理解すること・受け入れることが難しい雰囲気を感じ取ったため、それ以降、カミングアウトをすることをやめました。親に理解されない・受け入れてもらえないことはすごく悲しいことで、一時期は悩みましたが、「私は私。私の人生」と割り切っています。わたしは前述のように割り切りました（笑）。しかし、いろんな考え方があります。皆さんは自分が生きやすいようにいろんな知識や方法を知り、乗り越えていって欲しいです。そして関西学院大学には知識や方法を得る場があります。そして相談する場があります。そしてそれは皆さんが得る場であり提供する場ともなります。

私がカミングアウトできたり、また自分のセクシュアリティを認めることができた背景には、すごく恵まれた環境があったからだと思います。特に

兄や友人たちに拒否されず、受け入れてもらえたことがとても大きかったと思います。大学卒業後の今、なにか活動をしているわけではありません。これからもするかどうかわかりません。ですが少しでも拒否しない空気感や雰囲気を会社や地域の中でつくり、そして私自身ができる限りセクシュアリティやマイノリティをカミングアウトすることで、もし孤独感や閉塞感を感じている人がいれば力になりたいと思っています。

最後に、男性、女性など関係なく、好きになった人がたまたま女性、男性、またはいろんな性、それだけのことであると私は思います。卑下することなど何もなく、気持ち悪いと考える人がいても、人を好きになるという想いは誰しもが経験または見聞することがあり、理解できる可能性があると思うからです。性ではなく、その人の人柄や性格、見た目が好きという気持ちは、そこから生まれるのではないかと思います。そのような考えが社会一般的とは言わずとも、少しでも浸透し、そういう見方があるということを知ってもらうことができれば、LGBTの人々へのあからさまな嫌悪や偏見がなくなるのではないかと思います。

また、LGBTやマイノリティ、セクシュアリティに対する見方が少しずつ理解されているようにも感じるということは前項にも述べました。数年、数十年前まではLGBTやマイノリティ、セクシュアリティはタブーという闇の中で燻り、表には決して明るく出てくることはなかったように思います。それが今やニュースや新聞で取り上げられ、堂々と裁判も行われています。また、男女どちらでも使用できるトイレができたり、芸能人でもカミングアウトをしている方もいたりと、今、私の知っている社会はいろんな権利を主張できる世の中になってきていると思います。SDGs などでも謳われているように、これからどんどんカミングアウトしやすい世の中になり、権利を主張できる世の中になっていくと思っています。でもそこには皆さんの想いや意志が欠かせません。今世界が優しい方向に動いているのは、多くの人たちが主張をし、意志や想いを発信してきたからです。無理に何かしないといけないわけではありません。ですが少しでも自分の中に主張や発信をしていこうという気持ち、そして分かろうという気持ちや知ろうという気持ちを持っておくことで、いつか、ある時、誰かに優しくできているか

もしれません。

私は関西学院大学に入学できてよかったと思っています。関西学院大学には知識や方法を得る場や相談する場など、得る場に恵まれている大学だなと思うからです。また関学のスクールモットーである”Mastery for Service”は、「奉仕のための練達」と訳され、隣人・社会・世界に仕えるため、自らを鍛えるという関学人のあり方を示しています。なので関学で学んでいる皆さんはたくさん学び、知識を得て、たくさんの人にアウトプットし、場も設け、優しい世界を作っていってください。これからも社会はどんどん進化し、善い方向にも悪い方向にも進んでいくかと思います。皆さんは関学で得た学びを元に、誰かに強制されるわけではなく、あなた自身の主張や思いを持ちながら、知ることやわかろうとする気持ちを大切にすることで、優しい世界を作りに貢献出来ると思います。それができると思っており、そうであってほしいと願っています！